

白山ふるさと文学賞

第二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生中学年作文の部 最優秀賞

友達っていいな

鳥越小学校四年

石倉 真理子

受賞の言葉

すばらしいししょうをいただくことができ、とてもうれしいです。

ありがとうございます。これから心に感じたことを文章に書いていきたいと思っています。

そして、いろいろなことにチャレンジしていきたいと思っています。

わたしは、スイミングスクールへ行っています。今までは、家の近くのスクールへ通っていました。そこは同じ学校の子が何人もいたから、いつも楽しくスイミングをしていました。でも、そのスイミングスクールがなくなってしまうので、今年の四月からは、少し遠いスクールへ通うことになりました。兄は、じょうずに泳げるようになっていたので、もうスイミングは卒業することになりました。まだじょうずに泳げないわたしを心配したおばあちゃんが、

「真理子、これどうや。」

と言って、新しいスクールのちらしを見せてくれました。わたしは、心の中で「えー。」と思いました。スイミングはいやじゃないし、兄のようにじょうずにやりたい気持ちはあるけど、友達がいな所へ一人で行くのはいやだったからです。

学校で、同じスクールに行っていた子に聞いたけど、だれも行く人はいませんでした。まよっている、母さんが、

「すぐに友達できるよ。兄ちゃんみたいに泳げたらいいよー。」

と言いました。わたしは頭の中で、兄のように泳ぐ自分を想像して、にんまりしました。母さんもわたしの顔を見て、にんまりしました。

初めて新しいスクールへ行く日、わたしはきんちようして、おなかがいたくなりました。スクールまでは、おばあちゃんが車で送ってくれます。おばあちゃんの車の中で、楽しかった前のスクールのことを思ったら、なけてきそうでした。

「ばあちゃんここでずっと見てあげてから、安心して行っておいで。」と言われて、わたしは一人、トボトボと中へ入って行きました。

ドキドキしました。同じスイミングキャップを持っている人の方を、チラッとチラッと横目で見ながら、「あの子もかな。」と思っていました。わたしのように、一人で来ている子はいないみたいでした。わたしは、とても不安でしたが、同じコースの子はみんなやさしそうな子ばかりでした。でも、同じ学校の人達どうしでおしゃべりをしているので、なか

なか声をかけることができませんでした。おばあちゃんがいる方を見ると、ガラスの向こうに、心配そうにのびあがってわたしを見ているおばあちゃんがいきました。わたしは、「だいじょうぶ。」とつたえるため、小さく手をふって合図しました。

帰りの車の中は、行く時とちがつて、気持ちがすっきりしていました。でも、前のスクールへ行っていた時とはぜんぜんちがう気持ちでした。わたしは心の中で、「友達がいるのといないのでは、ずいぶんちがうなあ。」と思いました。

何度目のスイミングの時、新しい子がやって来ました。わたしと同じように一人ぼっちでいました。「きつとドキドキしているだろうな。」と思い、勇気を出して、

「こんにちは。」

と話しかけてみました。わたし達はその日のうちになかよくおしゃべりできるようになりました。その日はこれまでとちがいが、帰りの車の中でとても気分がよかったです。一週間後がとも楽しみになりました。

友達がいるということは、こんなにもすてきなことなんだと思いました。

せつかなかよくなれたところに、わたしは自転車で転んで、足にけがをしました。きずぐちがきれいになおるまでスイミングをお休みすることになりました。わたしは、なかよしになれたあの子が心配でした。「一人ぼっちで大じょうぶかな。」「さびしい思いをしていないかな。」「せつかなかよしになれたのに、やめていたらどうしよう。」と足のケガを見ながら、不安な気持ちでいました。

けががなおってスイミングへ行ったらわたしは、友達を見つけた時、ウワァーっとうれしくなりました。わたしが休んでいる間に、ほかに友達ができていました。一人ぼっちじゃなかったと知って、心の中で「あー。よかった。」と思いました。わたしのことを心配していたと言ってくれた時、心の中がとってもあたたかくなりました。

今は、みんなとおしゃべりができるようになり、おにごっこをしたりして、楽しくスイミングスクールへ通っています。

新しいスイミングスクールへ行って、一人ぼっちだったわたしは、友達が増えてすぐ大切だということに気がつきました。友達がいると不思議な力がわいてきます。

もし、また新しい子がスクールにやって来たら、「こんにちは。」って声をかけてあげたいな。困っている子がいたら、「大じょうぶ。」って声をかけてあげたいな。一人ぼっちの子がいたら、「一しよに行こう。」って言ってあげたいな。

